みどりの地球を みどりのままで

共生の時代

'07 11月

●ホームページ　http://www.greencoop.or.jp/

●発行：グリーンコープ共同体理事会　●編集：共生の時代・編集部　●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階　TEL092(481)7923 FAX092(481)7876

4・5 面に関連記事

Contents

グリーンコープ共同体として新たな歩みがはじまります　2

うちのメーカー・うちの生産者 ⑲
オルター・トレード・インドネシア　エコシュリンプ　3

これまでも これからも 守り育てていこう　4・5
グリーンコープびん牛乳！

海に、空に、放射能を垂れ流さないで！
－生産者と消費者が共につくる再処理工場阻止運動－　6

グリーンコープ生協みやざき発
フリースペース誕生!!　7

グリーンコープの輪・和・環

■プロフィール■

1958年東京都世田谷区に生まれる。高校・大学を通じてラグビーに打ち込む。1982年旧雪印乳業（株）入社。福岡・神戸・札幌など各地の工場勤務を経て2007年1月福岡工場長に就任。家族は妻と長男（中2）長女（小4）の4人暮らし

自然の恵み、びん牛乳をお届けします

日本ミルクコミュニティ㈱
福岡工場長

田中　宏治（ひろはる）さん

兄の影響でラグビー三昧の毎日を送っていた田中さんに転機が訪れたのは高校1年の秋のこと。1974年、新聞連載がはじまったばかりの有吉佐和子の「複合汚染」に目が釘付けになった。

時代は高度経済成長期、食品添加物や農薬、公害などによる人体や環境への影響が社会問題化していた。「これまで食べてきたものは一体なんだったのだろうか」と、不安をかき立てられた。「複合汚染」への反論や容認など、さまざまな情報が飛び交う中、一体何が真実なのかが分からないままだった。「それなら自分の目で真実を確かめたい」と、農学部に進路をシフトチェンジした。「早稲田でラグビーをやりたい」という夢が一転した瞬間だった。漠然とサラリーマンへの道を考えていた田中さんに「母は『お前は農業をやるつもりか』と驚いていました」。

入社して25年余りを牛乳やデザートなどの製造畑一筋で走ってきた。旧雪印（株）にまつわる食中毒事件や食肉偽装事件が相次いで起こった時期に製造課長職にあった田中さん。「確かな商品を作るには衛生管理の徹底はもちろん、従業員の顔色、動作一つにも気を配ります。なぜなら人は絶対に失敗しないとは言い切れないからです」。大きな教訓を得た出来事だった。

全体を統括する工場長は品質・製造・設備管理などのいわば総監督だ。72度15秒のパスチャライズ殺菌は未知の世界、温度管理や設備関係など一から学んだ。「びん牛乳は小さな子どもを扱うかのように気を使うデリケートな商品。原乳本来のおいしさ、風味を損なわずに製造することがメーカーとしての使命だと自負しています」。グリーンコープとの出会いから製造メーカーとしてびん牛乳開発に立ちあった当時の工場長社内敏幸さんは雲の上のような人だった。その福岡工場長として携わることになったことに縁を感じたという。

びん牛乳専用工場の見学に訪れる組合員との出会いは新たな経験となった。うれしそうに専用タンクを見る組合員の表情が新鮮だったという。「この工場はみなさんの財産です。びん牛乳のおいしさや内容の確かさをガラス越しでも十分に分かっていただけるはずです」。挨拶にいつも添える言葉だ。

ほぼ3年ごとの転勤も今では慣れたもの。地域のラグビーチームに参加したり、祭りも積極的に楽しむ。日課のウォーキング後に飲むびん牛乳は格別の味だ。「牛乳は大地や牛が育むまさに自然の恵みです。そのままをびんに詰めて提供したい」。食べものとしてのびん牛乳製造にかけるまなざしは厳しい。

4・5面に関連記事掲載

送信

風邪をひいた。久々に発熱、おまけに出張先で。同行の仲間に薬をもらったり、世話をやかれながらの2日間。「六ヶ所再処理工場反対！」「GMいらない！」のシュプレヒコールの夢を見てホテルのベッドで目覚めた。

出張を終え何とか帰宅。直後、ドカッと疲れが。娘が「あー熱い！かわいそ、私にうつしていいよー」と寝室まで付き添う。夫は「口を開けて」と私の口に黒糖飴を放り込んだ。その夜はまったく夢も見ず朝まで眠り込んだ。翌朝、ガランとしたリビングには、昨日買ってきた土産はひとかけらもなかった。「あはー、でもわが家っていい」。

出張先での夕食時の仲間同士の会話、あれはみんな家族自慢だったのかしら。なんだかんだ言っても家族からエネルギーをもらって元気に生協活動してるのね！

私も再チャージして行ってきます。

グリーンコープ生協ふくおか理事長　宮中　智美

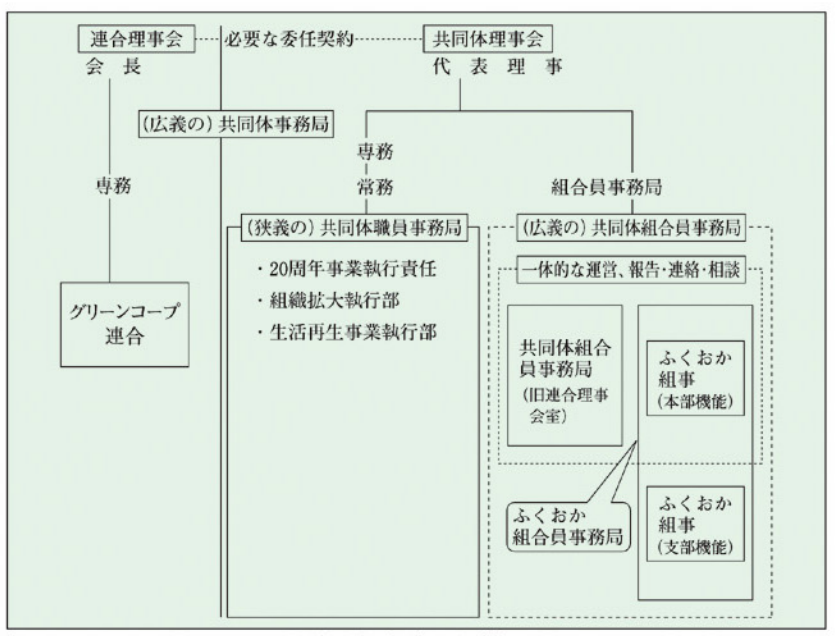
グリーンコープ共同体として新たな歩みがはじまります

9月12日、組合員主権を貫く一つのグリーンコープを作るためにグリーンコープ共同体（以下、共同体）がスタートしました。今後共同体に集う15の会員生協（グリーンコープ連合を含む）が相互に支えあってグリーンコープ運動と事業を大きく飛躍させていくことになります。これからのグリーンコープの運動と事業を運営するため新たな連帯組織として、生活再生事業や20周年事業など、さらに豊かに事業や運動を広げていきます。そのための具体的な取り組みについて報告します。

新たな組織作りをはじめます

皆の財産を一体的、効率的に活用するために具体的に行う事業と運動についての責任と権限はこれまでどおり各会員生協にあります。そのことを踏まえて、共同体として歩み出すためにはしっかりした組織作りが大切です。そのためにオールグリーンコープの共通財産としての「共同体委員会」、「共同体組合員事務局」を形作っていきます。右図にあるように、共同体組合員事務局の形成に向けてはまずグリーンコープ生協ふくおかがさきがけとしての役割を担います。

そして、２００８年1月16日、組合員と職員が一体となって共同体として歩み出す実感を分かちあうために、グリーンコープ共同体結成大会が開催されることになっています。



共同体事務局組織図

生活再生事業をオールグリーンコープに広げます

共同体として統一して取り組む課題となっているのが生活再生事業です。多重債務に苦しむ人をはじめ、お金の悩みについて相談を受ける取り組みとして、２００６年８月グリーンコープ生協ふくおかで開始されました。1年間で電話相談数が１０００件以上となり、うち５８０以上の家族と面談、80％以上が実質的解決の途上に入り、安心した生活を取り戻すことができました。必要性が実感できる結果が出ていることから生活再生事業が社会的に待たれていたことが分かります。この事業が順調にはじめられたのはグリーンコープ生協ふくおかの組織をあげての尽力があったからだけでなく、経験のない事業の立ち上げに伴う財政的支援をグリーンコープ全体が担ったことが大きかったと言えます。

これからは、生活再生事業を共同体のもとに位置付け、新たな立ち上げ支援をオールグリーンコープで取り組んでいきます。すでに２００７年から、くまもと、やまぐち、おおいたで事業開始に向けて検討がはじまっています。各会員生協の通常総代会での検討・確認を受け、職員対象のアンケート調査や意義・内容についての学習会など、ふくおかの経験を参考に、ていねいに準備がすすめられています。さらに秋のつどいで組合員に向けた内容の共有化・深化を図り、２００８年の事業開始をめざしています。また、他の会員生協でも順次すすめられていくことになります。

共同体としては特に立ち上げ期の財政的支援をすると共に、ふくおかで経験を積んだ人材を派遣し各会員生協の立ち上げを支援します。また、管理プログラムや生活再生相談貸付の運用プログラムなどを共同開発し共有します。

グリーンコープ誕生20周年を記念して

１９８８年にグリーンコープ連合が誕生して20年。築いてきた確かなグリーンコープの歩みを大切に守り育てていくことが求められています。

２００８年、グリーンコープ誕生20年を記念する企画を大々的に行います。これまで培ってきた力でグリーンコープ運動と事業を広げていきます。大きく成長したグリーンコープを社会にアピールしていくためのダイナミックで楽しい企画が計画されています。

①大講演会
②グリーンコープ国際会議
③写真展
④コンサート
⑤テレビ・ラジオCM
⑥テレビ・ラジオ番組
⑦新聞広告
⑧インターネット関連（ブログなど）
⑨グリーンコープらしい旅行事業
⑩組合員なんでも電話
⑪料理コンテスト
⑫商品交流会（取引先・生産者交流会）
⑬記念誌出版・DVD
⑭記念グッズ
⑮商品の利用普及（スタンプラリーなど）
⑯その他

うちの生産者 79

インドネシア
オルター・トレード・インドネシア

うちのメーカー

食卓から共生を考える エコシュリンプ

「エコシュリンプ」はネグロスバナナと同じ民衆交易品。ATJ（オルター・トレード・ジャパン）をとおして、インドネシアから届けられています。取り組みをはじめて15年。伝統的な手法を守りながらも、鮮度にこだわり、おいしいエビを日本に届ける努力を続けているエコシュリンプの産地のようすを報告します。

▲エビは75～90日で成長するため、一つの池で年に３回、養殖を行います

◀プラヤンを使っての収獲作業

自然と共生しながらエビを育てる「伝統型粗放養殖」

インドネシア第二の都市・スラバヤ（ジャワ島）。その東部に、エコシュリンプの産地の一つ、シドアルジョがあります。養殖池までは、途中車からバイクに乗り換え、草の生い茂る道を走ります。

養殖池は淡水と海水の交じり合う汽水域にあり、潮の干満によって微妙な塩分濃度が保たれています。池の周囲には、植樹して1年程経った幼いマングローブがあちこちに育っています。

シドアルジョでは３００年以上も前から、バンデン（英名・ミルクフィッシュ）という食用大衆魚の養殖を行っていましたが、インドネシアでエビの養殖が盛んになるにつれ、'80年代後半からエビ（ブラックタイガー）を同じ池で一緒に育てるようになりました。

活発で体の大きなバンデンが池の中を元気に泳ぎまわることで酸素を池に取り込み、エビは池の底で育つ、一つの共生の形がここにもあります。

収獲も自然に寄り添って

エコシュリンプの餌は、池のガンガンという水草が発酵・堆肥化し発生したプランクトンやミミズなど。人工飼料は一切与えずに稚エビから約3ヵ月間、「1㎡の広さにエビ3匹」程のゆったりとした環境で育ちます。

収獲はプラヤン（竹かご）、手づかみ、バガン（魚網）などそれぞれの地域の伝統的な手法で行います。プラヤンによる収獲は、新鮮で冷たい水に向かって泳ぐエビの習性と、新月と満月の大潮の期間活発化するエビの生態を利用して行われます。そのため、収獲が夜中になることもありますが、人間が自然に合わせる方法をとっています。

収獲後、現地の工場で加工、袋詰めされ、一度も解凍されることなく組合員の手元に届けられます。

エビ農民として誇りを持って生きる人たち

生産者のナスリさん

２００３年、より地元に根ざしたエコシュリンプ事業をしていくために、現地にATINA（ATJ100%出資の現地法人）が設立されました。現在、産地はインドネシアのジャワ島東部の2産地（シドアルジョとグレシック）とスラウェシ島南部の1産地（ピンラン）に広がっています。

グレシックで、エビの倉庫（集荷）業も営む池主のナスリさんは、倉庫の一つを使い、ATINAから委託を受けてエビを集荷しています。彼は自ら政府に働きかけ、この地域で「粗放型養殖」を広め、全体の養殖レベルを上げていこうとしています。このように農民側から政府に働きかけるのは非常に珍しいケースです。

「粗放型は集約型に比べれば利益は少ないけれど、環境への負荷などリスクも少ない。もっと呼びかけていきたい」とナスリさんは言います。

養殖を続ける一方で、池をどう活性化させていくかという課題にも果敢に取り組んでいます。シドアルジョの池主で、ATINAの調査・開発チームのスタッフでもあるイルルさんは、エビの餌となるミミズを増やすための有機肥料の研究も行っています。イルルさんは「農民に大きな負担をかけさせずに、収量を増やしていくことが必要です。研究チームのメンバーですが、僕はエビ農民ですよ」と笑顔の中にも誇りを滲ませながら語りました。

研究もしている「エビ農民」・イルルさん（中央）

● エビをめぐる問題 ●

'61年のエビの輸入自由化によって日本のエビ輸入量は急激に増大。大規模資本による東南アジア各地での養殖池の拡大へつながった。その結果、海洋資源への打撃、マングローブなどの森林伐採、密飼いによる病気の蔓延、薬漬けのエビ、池周辺の環境汚染と土地の放置など、さまざまな問題が生み出された

エコシュリンプの収獲から出荷まで（シドアルジョ）

収獲

鮮度を保つため、池での収獲後すぐに氷漬けにする

池で監査員が立会い、タグでボックスを閉じる。途中で開けると分かるようになっている

集荷所

選別

サイズ・グレードを選別する。瞬時に判断する

工場

頭部除去

タイガーネイル（トラの爪）と呼ばれる器具で頭部を除去

金属探知機

金属探知機に２度通し異物混入を防ぐ

選別
加工
（殻むき・背ワタ除去）
凍結

グレージング（氷膜をつける）

氷膜をつけることで、さらに鮮度を維持できる

→ **出荷**

食卓から見えた問題を四つの共生の視点で考えたら

世界中で最もエビを消費する国、日本。「私たちが食べることで、環境へ負荷をかけていることがあるのなら、そのことをきちんと考えよう」。グリーンコープは当時、自然と共生しながらエビを養殖していたインドネシアの農民との出会いをきっかけに、エビの民衆交易をはじめました。

その後順調にすすんでいるかに見えた中で、釘や竹串などの異物混入事故が起こりました。結果的には、現在のトレーサビリティのシステムを確立させ、衛生管理も徹底させることができました。この問題は品質管理にとどまらず、民衆交易のあり方をも問うことになりました。そのため、改めて、生産者との関係作りからていねいにやり直してきました。

エコシュリンプの民衆交易は、世界的なグローバリゼーションの中で、北による南の搾取を越えたオルタナティブな関係のあり方の一つの形です。その基本にはグリーンコープの「四つの共生」の理念が貫かれており、今後もさらに連帯関係を確かなものにしていくことになります。

●エコシュリンプは次の五つの約束事に沿って取り扱われています。
①環境保全型のエビ事業であること
②生産者・加工業者・消費者各々との間で協同関係をつくること
③食品として安全性を追求すること
④価格構成が生産、流通、消費の段階で明確であること
⑤公正な価格で安定した取引であること

37万人の組合員と生産者、メーカーの力で開発したびん牛乳は「経済効率優先の商品をいのちを育む食べものへ戻す」グリーンコープの食べもの運動の象徴。ほんものの牛乳をびんに入れて飲みたい、という私たちの思いとこだわりが実現されたものです。それは単にびん牛乳をつくるということにとどまらない、新たなグリーンコープ運動の創出でした。開発から今日までびん牛乳を通じた組合員・生産者・メーカー三者の信頼関係はより強く築き上げられてきました。私たちの手元に届くようになって4年目を迎えたびん牛乳の歴史を振り返ってみます。

はじまり

どを添加す
る生乳がど
かりません
ンコープの
をつなぎ、
て、「成分
運動をはじ

高度経済成長期、経済効率優先の企業のあり方はさまざまな社会問題や公害を生み出した。大気汚染など、さまざまな環境破壊や食品公害、その代表的な事件の一つが「森永ヒ素ミルク事件」だ。1955年、粉ミルクの乳質安定剤の中にヒ素化合物が混入し、130人以上の子どもたちが死亡、現在も中毒症状や重い後遺症で１万人以上が苦しんでいる。当時日本の牛乳のほとんどは、超高温殺菌（120℃２秒以上）法でつくられ、「牛乳」と表示できる３%以上の乳脂肪分を抜き取って調整された「調整牛乳」が市場に出回っていた。その後、130℃～150℃で完全殺菌し、アルミ箔で内貼りした容器に無菌充填、常温で３～６ヶ月腐らないというLL（ロングライフ）牛乳も登場した。

これからも
ていこう
ープびん牛乳!!

▲2003年10月18日
びん牛乳専用工場の起動式。テープカットする、日本ミルクコミュニティ（株）社長とグリーンコープ連合会長（当時）

「びん牛乳」を伝える５つのキーポイント

Point1 品質・内容

…自然の恵みをいただいた、より生乳に近い牛乳、どこにもない逸品…
日本初の「non-GMOびん牛乳」は72℃15秒パスチャライズ殺菌

すくすくと健やかに育つ牛が食べるのは、遺伝子組み換えされていない、トウモロコシ・大豆・ナタネが主流の餌。グリーンコープの「安心・安全」へのこだわりで実現したnon-GMO飼料。しかも良質の原乳だから可能な殺菌温度。人間にとって有害な菌を死滅させ、生乳の持つ本来の成分（可溶性カルシウムやたんぱく質）や性質を保っている。

Point2 生産者

…特定された酪農家約45戸が私たちの生産者…

「酪農ホームステイ」や「グリーンコープ生乳生産者交流会（タオルを贈る取り組み）」をとおして、生産者と交流を深め、「産直」＝産地と顔の見える関係をつくってきた。グリーンコープのこだわりや思いに賛同してくれた、熊本県菊池地域農協管内の酪農生産者と一緒につくった。

Point3 環境

…環境に、地球に、やさしい「リユースびん」…

こだわりの容器は、重さ300gの超軽量リユースびん。環境への「思い」が込められ繰り返し利用できる。しかもおいしさがそのまま。キャップも回収してリサイクルする。

Point4 おいしさ

…ほんとうの味、安心・安全がおいしい…

生乳のおいしさが生きている。牛乳本来の味が“ぎゅっと”詰まっている。一口飲めば、違いが分かる。グリーンコープのこだわりが伝わってくる。

Point5 価格

…子どもたちの未来、「いのちを育む食べもの」を社会

生産者の情熱、メーカーの姿勢、組合員の思い、それらが出会って実現できた適性価格。

ーとの出会いがあったから
た

の「食べもの運動」を理解し、びん牛乳を共につくり出
業（株）。食中毒事件を乗り越え、食べもの本来のあり方
ートしたばかりで、「食べもの＝いのちの糧」というグ
念に呼応してくれました。最高の技術力と、パスチャラ
の蓄積もあり、グリーンコープにとっても心強いパート

協直販」、「全国酪農業協同組合連合会」が経営統合し「日本ミルク
設立されました。

びん牛乳を守り育てて
グリーンコープの食べもの運動を飛躍させよう！

グリーンコープの食べもの運動のシンボルであるびん牛乳の開発は、グリーンコープから「食べもの」に対する社会への提案でした。これを手がかりにグリーンコープは「21世紀型生協」へ向かうことになりました。

これからも生産者とメーカー、そしてグリーンコープの37万人の組合員が三者一体となって、びん牛乳を守り育てていきましょう。

これまでも守り育てグリーンコ

おめでとう！びん牛乳誕生4周年

2 殺菌温度への挑戦

1980年当時は、日本の牛乳の大半が、すべての菌を殺してしまう超高温（120～130℃２秒）殺菌法でつくられていました。「高温での殺菌はせっかくの栄養分をこわしてしまうのでは？」「原乳となる生乳はどんな人が生産しているの？」という素朴な疑問が出発点となり、殺菌温度を下げることへの挑戦がはじまりました。

1 ほんものの牛乳を探す旅のは

今から約30年前の日本の牛乳は、植物油脂なと
る「混ぜもの牛乳」が当たり前の上、原乳となる
こで生産されたものかも分か
でした。そんな中、グリーン
前身である各地の地域生協が手
「ほんものの牛乳」を求めて
無調整の牛乳」の共同飲用運
めました。

3 1985年パスチャライズ牛乳誕生！そしてノンホモ牛乳の誕生へ

生乳の風味を損なわない殺菌温度を追求した結果、72℃15秒のパスチャライズ殺菌が実現。そのためにはまず細菌数の少ない良質の生乳が不可欠でした。組合員のできることとして母牛の乳房をきれいにするために清潔なタオルを集め「タオルを贈る取り組み」を開始しました。その後も毎年交流を行い、生産者にタオルとせっけんを贈り続けています。

1988年にはホモゲナイズ工程を省き、もう一歩自然に近づけたノンホモパスチャライズ牛乳が誕生しました。

※ノンホモ　ホモゲナイズ（高圧で原乳中の脂肪球を細粒化し均質にする）していない

びん牛乳のよさを息の合ったコントでアピール

グリーンコープ生乳生産者交流会（タオルを贈る取り組み）

▶生産者代表の矢野桂吾さんへ牛の乳房を拭くためのタオルとせっけんの目録を渡す

4 1998年、日本で初めてのnon-GMO飼料の牛乳誕生！

1997年、グリーンコープは遺伝子組み換え問題に関する学習会を重ね、牛の飼料をnon-GMOに変更することに決定しました。飼料を変えることは酪農生産者にとって大変なことです。グリーンコープのその呼びかけに熊本県菊池地域の生産者約80人が応えてくれました。

※non-GMO
遺伝子組み換えをしていない

▲2007年度酪農ホームステイ

▲大切に育てられたこの子牛ももう母牛になりました！

5 究極の理想、びん牛乳

次の課題は容器を「紙パック」から味を損ねない「びん」にすることでした。内容的に究極にたどり着いた理想の牛乳。だからこそグリーンコープのびん牛乳をつくるための専用の製造ラインが必要でした。しかし、当時、グリーンコープが求める規模のびん牛乳をつくる工場がありませんでした。それなら自前の工場を！と、「びん牛乳」専用の工場をつくることにしました。パスチャライズ用の殺菌機、洗びん機、びん牛乳専用の充填ライン、そしてびん専用のさまざまな備品など…「びん牛乳」専用工場の建設に必要な費用のために「みるく出資金」や予約注文に取り組みました。

6 メーカー実現した

グリーンコープの
したのは旧雪印乳業
を求め新たにスタ
リーンコープの理念
イズ処理についての
ナーでした。

「雪印乳業」、「全国農協
コミュニティ（株）」が

海に、空に、放射能を垂れ流さないで！

―生産者と消費者が共につくる再処理工場阻止運動―

グリーンコープは生活クラブ生協や大地を守る会、日本消費者連盟など、青森県六ヶ所村にある核燃料再処理工場の本格稼動に反対する団体と共に「『六ヶ所再処理工場』に反対し、放射能汚染を阻止する全国ネットワーク」（以下全国ネットワーク）を結成し、独自の取り組みをはじめました。全国ネットワークには500以上のメーカーや生産者団体なども賛同団体として名前を連ねています。

全国ネットワークの運動は、「キックオフ集会in東京」（7月28日）を皮切りに、8月25日には現地青森における全国集会へと大きなうねりをつくり出しています。この間の取り組みについて、報告します。

グリーンコープ共同体の吉田文子代表理事をはじめ各会員生協の理事長らが再処理工場反対の思いを国や関係自治体に届ける「メッセージカード」の取り組みを呼びかけた

「いのち」を原点に力強く運動がスタート

全国ネットワークの運動の蹴り出しである「キックオフ集会」に集まった約300人の参加者で会場があふれました。

基調講演の講師は原子力資料情報室の澤井正子さん。再処理工場から廃棄される放射性物質の危険性をテーマに話がありました。再処理工場は放射能を垂れ流ししてしまう構造になっており、日本原燃や青森県もその事実を承知していることが分かりました。しかもその排出量は普通の原発一基が1年間で排出する量を1日で排出するといいます。大気中にはクリプトン85や炭素14など、海中へはトリチウムやヨウ素129など、多種の放射能が放出されます。それは最終、農産物や海産物をとおして私たちの身体に蓄積されていくことになるのです。

そのような状況を危惧して立ち上がった岩手県の重茂（えも）漁協をはじめとする漁業協同組合の生産者らも参加しました。放射能の垂れ流しは「死活問題」であるとして、断固闘うという意志をアピールしました。

また、放射能汚染の実態を自主的に監視していくために、自主的検査体制を構築するという提案もされました。そのほか、再処理工場反対の意思を政府や自治体に届けるメッセージカードや署名運動など、盛りだくさんの取り組みが紹介され、本格稼動阻止に向け熱気にあふれた集会となりました。

全国各地からの参加団体の代表がそれぞれの立場で再処理工場への思いをアピールした。グリーンコープの代表として、グリーンコープ生協さがの田中裕子理事長が「玄海原発のプルサーマルと六ヶ所再処理工場は表裏の関係にある。再処理工場を阻止できればプルサーマルが止まる。共に頑張りましょう」とアピールした

自然豊かな街に全国から仲間が集結し再処理にNO！

青森集会へは、鹿児島から北海道まで全国から同じ思いを持つ仲間ら約350人が集まりました。

集会前に青森市街地での街頭行動を行い、道行く人に再処理工場の危険性を力強くアピールしました。大型バス2台で駆けつけた重茂漁協の大漁旗や各団体ののぼり旗が風に揺れながらのパレードは圧巻でした。

集会会場となった青森市文化会館にはあふれんばかりの人・人・人。多彩な企画に全員がステージに注目しました。

再処理工場に関する現状報告として、3人の科学者から問題提起がありました。小出裕章さん（京都大学原子炉実験所）からは、東海村のJCO臨界事故の悲惨なようすの報告をとおして「日本原燃や国は少しくらい放射能を垂れ流しても大丈夫だと言うが、どんなに低レベルでも放射能は危険。特に子どもは被害を受けやすい」と何としても子どもを守る必要があることを強調しました。

藤田祐幸（ゆうこう）さん（放射能汚染食品測定室代表）からは、チェルノブイリ原発事故から食べものを考えようという視点で話がありました。「六ヶ所再処理工場で事故が起こったらチェルノブイリの比どころではない」「再処理工場を稼動させてしまうことは推進側や無関心な人も含め、この世代すべての人が『共同正犯』だ」と力説しました。

海洋学者の水口憲哉さんからは、「このまま稼動したら六ヶ所村から放射性廃液が放出される。海は汚染され、その範囲は首都圏まで及ぶという実験結果が出ている」「海の汚染という点で、現在サーファーが運動に関心を持って取り組んでいる。この種を育てて、大きな広がりをつくっていくこと、知らない人に知らせることが大切」。今からでも遅くない、共に頑張ろうと会場にエールを送りました。

集会の終盤、会場全体が「絶対阻止したい」との思いを意思一致させると共に集会の成功を確認しあった

核燃料サイクル施設内に活断層が見つかった。耐震計算のミスも発覚！

青森現地の反対運動団体の代表者らからも報告がありました。

再処理工場内の装置2台の耐震計算ミスが大きく報じられたことを例にあげ、「新潟県の柏崎・刈羽原発で起こったことは六ヶ所でも起きることが想定できる」とデータ隠しを非難しました。また、「核燃料施設の下や近くには多くの活断層が走っている。必ず止めなければ大変なことになる」と稼動阻止を訴えていくことの重要性を訴えました。

全国から集まった仲間によるリレートークもあり、各団体の代表がそれぞれ趣向を凝らしアピールをしました。最後に、「いのち、豊かな自然、食べものを守るために…、放射能汚染をもたらす再処理工場の稼動中止を強く求めていきましょう」と集会アピールを採択しました。

署名活動にも取り組んでおり、組合員から寄せられた署名を内閣総理大臣や経済産業大臣へ届ける準備をしています。耐震計算ミスなどにより本格稼動が来年2月に延期になりました。今後も稼動阻止を求めて、さまざまな取り組みを展開していきます。

グリーンコープ生協 みやざき 発

フリースペース 元気☆げ～んき

みんな あつまれ フリースペース元気☆げ～んき スタート!!

2006年グリーンコープ生協みやざきに誕生したフリースペース「元気☆げ～んき」。そこにかかわる運営委員全員が子育て真っ最中です。宮崎市で行われた活動のようすについて、報告してもらいました。

親子でリズム遊び

みやざきで少しずつはじまった福祉の取り組み。理事会で私たちにできることを考えた時に、最初に取り組めると思ったのが子育て応援でした。組合員さんからも「子育ての息抜きの場がほしい」、「子どもと参加できる場があったらいいのに」などの要望がありました。そして、昨年の秋に誕生したのが、子育てひろば「元気☆げ～んき」です。名称の「元気☆げ～んき」には、「ここに来て大人も子どももみんな元気になってほしい。みんな元気に遊ぼう！」という願いが込められています。

立ち上げ時の運営には理事や地区委員がかかわりました。今年、名前をフリースペース「元気☆げ～んき」と変え、フリースペース運営委員会を発足し、地域組合員さんから運営委員を募集して新たに活動をはじめました。6人の運営委員全員が子育て真っ最中です。赤ちゃんを連れての運営委員会やフリースペースの運営は大変ですが、一緒に楽しみたい！と頑張っています。

昨年度は3回、今年度はこれまでに2回開催してきました。毎回、たくさんの親子の参加があり、子育て応援がほんとうに必要とされていることを実感しています。

★★★

9月20日、宮崎市で開催されたフリースペース「元気☆げ～んき」には29組の親子が参加しました。ちょっぴり不安そうな子、元気いっぱいの子など表情はさまざまでしたが、だんだん笑顔になってきました。毎回季節が感じられるプログラムを盛り込んでいます。手遊びうた、絵本の読み聞かせ、エプロンシアター、リズム遊び、カンタン工作、おやつなど。エプロンシアターは子どもたちがあまり目にしたことがないのか、みんな一斉に注目していました。リズム遊びでは、「秋」を感じる「おいもの天ぷら」の歌に合わせて親子でスキンシップ！子どもたちの笑い声があふれていました。1時間30分の内容ですが、時間いっぱい遊び、お母さんたちの会話もはずみました。最初は不安そうにしていた子どもたちがまだ帰りたくないと言いながら帰って行く姿が印象的でした。参加者からは、「楽しかったです」「これからも企画してください」との声が届けられました。

エプロンシアターに興味津々の子どもたち

スタートしたばかりのフリースペース「元気☆げ～んき」。未熟な面もまだありますが、子育て中のみなさんと一緒に成長していけたらいいなと思っています。今後は私たちの住んでいる地域で、安心して子育て・子育ちができるような環境作り、場の提供、手助けができるように取り組んでいきたいと思っています。

グリーンコープ生協みやざき
理事長 杉尾 紀美子

報告

新潟県中越沖地震 お見舞金を届けました

柏崎市 若山副市長にお見舞金の目録を手渡す吉田文子グリーンコープ共同体代表理事

柏崎市佐藤ヶ池仮設住宅。市内に39ヵ所1,007戸があり約2,420人が入居している

10月18日、グリーンコープ共同体の代表理事吉田文子さんが、組合員を代表して寄せられたカンパ金を2地域と1団体に届けました。被災地は、これから冬を迎えます。カンパ金はそのための準備に有効に利用される予定です。

また、新潟県総合生協による地震復興のためのバザーが、10月21日に被災地で開催されました。グリーンコープでは主催団体である新潟県総合生協に連帯し、30万円相当のグリーンコープ商品を届けました。

カンパ総額 16,662,328円

寄贈先

柏崎市	8,000,000円
刈羽村	3,000,000円
中越復興市民会議	1,362,555円

※グリーンコープ生協ひろしま・くまもとからのカンパ金は、日本赤十字社をとおして現地へ届けられました。

No.4

放射能を海に棄てていいのですか？

青森県の六ヶ所再処理工場の本格稼動が予定されています。再処理というのは非常に分かりにくい言葉で、核燃料のリサイクルができてよいと思わせます。しかし現状は、ウラン燃料の燃えカスを集め、いろんな面倒な難しい工程でウラン燃料とプルトニウムを取り出します。プルトニウムというのは、核兵器にも転用できます。その過程で出てくる液体性の放射性物質を海へ棄てることになります。その量は1日で、1つの原発が365日かけて棄てる量に匹敵します。放射性物質は一旦海水で薄まることはあっても消えないわけですから、プランクトンや海藻、小魚などに付着し、取り込まれ、濃縮されてやがて私たちに人間に戻ってくるのです。

海に囲まれた島国日本に住む私たちは、ことの重大さに気が付かなくてはいけない。「放射能を海に棄てないでください。いのちが大事！」と声をあげていきましょう。

「放射能がクラゲとやってくる」（講師・水口憲哉さん）
2006年度グリーンコープ連合脱原発学習会（2/1）講演録より

グリーンコープ共同体組織委員会

言・い・た・い 読者投稿欄

- 思いがけない家族のひと言
- とっておきの一枚
- 私の好きな花

●400字程度 ●〆切 毎月末
●住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード（500円分）進呈。
●住所・氏名などの組合員の個人情報は、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8-36 博多ビル7F
グリーンコープコミュニケーションワーカーズ連（REN）
「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-481-7876
Eメールアドレス rikoho@greencoop.or.jp

身近な川から環境について考える

いま地域を考える No.184

きれいな水といのちを守る筑紫野市市民の会

川に人が集まり、毎回にぎわう。ボランティアで川遊びの達人が手伝ってくれたりもする

「きれいな水を五感で感じていたい」と辻本さん

福岡県筑紫野市で環境問題をテーマに活動しているグループ、それが「きれいな水といのちを守る筑紫野市市民の会」（以下、市民の会）。産業廃棄物問題に取り組む一方で、川掃除や川遊びをとおして子どもたちに水の大切さを伝える活動を続けている。この間の取り組みについては2008年福岡市で開催されるシャボン玉フォーラムで報告することになっている。

代表の辻本美恵子さん（グリーンコープ生協ふくおか組合員）に話を聞いた。

筑紫野市には二つの水系がある。宝満山源流から筑後川として有明海へ注ぐ流れと御笠川から博多湾へつながる流れである。川の下流域と上流域、それぞれに住む人たちにとって大切な水。それを育む川をとおして環境を守ることを市民の会は考えてきた。特に川の上流域の住民として川に思いを馳せてきた。

市民の会のスタートのきっかけは、合成洗剤が川や海の汚染の原因であることに問題意識を持って立ち上がったせっけん運動グループ「合成洗剤追放の会」だった。代表の辻本さんはその会のメンバーの一人として、精力的に活動にかかわっていた。1988年当時、100人を超すメンバーが「いのちの水を守りたい！」という一心でせっけん運動に取り組んだ。せっけん販売店一覧表の作成、廃油プリンせっけん作りなど市やグリーンコープ生協ふくおかの前身である地域生協とも連携しながら、身近な地域でせっけんをすすめる運動を続けた。市から苛性ソーダを無償提供してもらい、給食センターの使用油を活用してせっけん作りにも取り組んだ。

「いのちや水」を脅かすごみ問題

10年が経過する中、自然環境の悪化は社会的な問題となってきた。せっけん運動をとおして学んだ「いのちや水を守ることの大切さ」。それを大きく環境という視点につなげるために「合成洗剤追放の会」は名前を改めて新しいスタートをきった。それが「市民の会」だ。

まず、生活環境の内にある川のようすを知るために、近くを流れる川の調査をはじめた。

「川に育まれる小さな生きものたちがたくさんいることに改めて感動しました」と、辻本さんは当時を振り返る。

その頃、宝満川につながる上流河川の山口川にマンガンに汚染され黒く変色したサワガニを見つけた。マンガンは水質汚濁の指標ともなる化学物質だ。「黒いカニ」として報道された。1999年には山口川上流にある産業廃棄物処分場（以下処分場）で硫化水素が発生し3人の作業職員の死亡事故が起こった。市民の会も呼びかけ団体として設立にかかわり、「産廃連（県営山神ダム上流域産業廃棄物処理場対策連絡協議会）」を結成、処分場の反対運動に結集していくことになった。ごみ問題を考えていく上で欠かせないダイオキシン問題にもいち早く取り組み、環※境総合研究所の青山貞一さんを講師にした学習会や、県や環境省への働きかけなど根強い運動によって、処分場の操業を停止することができた。しかし廃棄物そのものは放置されたままで、水道水源のダムが有害物質で汚染される危険が残されている。現在ダムの水の安全を確保するために、県に対し廃棄物そのものの全量撤去を要請している。しかし、県は対応を保留しており解決には至っていない。こうした問題に詳しい弁護士の協力を得て公害調停に取り組む準備をしており、行政への働きかけも少しずつすすんでいる。

掃除が終わったら川遊びもでき、小さい魚を捕まえることもできる。子どもたちだけでなく、大人たちも童心に返り楽しい一日を過ごす

山口川で見つかった「黒いサワガニ」

川掃除や川遊びが川の大切さを教えてくれる

町を流れる鷺田川の観察や生きもの調査、川掃除が年間行事として定着してきた。はじめた当初は川にじゅうたんや自転車、クーラーなどが放棄され、ごみが投げ込まれている川だった。水が染み込んだじゅうたんを川から持ち上げるのに大人6人でやっとのことだったそうだ。ごみ収集車2台がすぐにいっぱいになった。住民による掃除の積み重ねによって空き缶やガラスびんなどはあるが、大型ごみは減り、川に流れが戻ってきた。

上流域の宝満川で「川遊び」をとおして子どもたちが身近な環境に興味が持てるようになればとはじめた活動も12年になる。豊かな自然の中で泳いだり、魚を獲ったりと川に人が集まり、毎回にぎわう。市の広報紙で呼びかけると、いつも40人以上の市民が参加する。リピーターも多く、若い家族連れの参加も多い。掃除や川遊びをはじめるグループも少しずつ増えている。

「今後は他のグループとも連携していきたい。水を汚すのは人間、そして守るのも人間。いつまでも守っていきたいと思います」と辻本さん。

上流の地域に住む者として市民の会の運動はこれからも続いていく。

※環境問題に積極的に取り組むNGO（非政府組織）。国や自治体の環境政策や環境関連制度の立案・支援をしてきた

放射能汚染測定結果報告(171)

2007年8月

放射能汚染食品測定室検査。NDは、検出限界値（1ベクレル/kg）以下です。
※は、グリーンコープ連合取り扱い商品です。

	検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計 ベクレル/kg
※	カレー粉	インド、中国 マレーシア、イラン モロッコ	ND	ND	ND
※	ビール	国産	ND	ND	ND
※	蜂蜜	中国	ND	ND	ND
※	鶏肉	熊本県	ND	ND	ND
※	鶏肉	山口県	ND	ND	ND
※	鶏飼料		ND	ND	ND
※	鶏卵	熊本県	ND	ND	ND
※	鶏卵	福岡県	ND	ND	ND

リユース リサイクル データ

2007年8月分

回収本数 1,160,370本　回収率 99.8%（7月15日～8月18日回収分）牛乳びん

回収本数 190,988本　回収率 55.4% リユースびん　※現在供給本数のカウント方法を見直しています。

回収重量 13,202kg　回収率 61.7% トレー

回収重量 37,410kg　回収率 94.6% モウルドパック

2007年9月の組合員数 377596人

（9/20現在）

グリーンコープ生協ふくおか
グリーンコープ生協さが
グリーンコープ生協（長崎）
グリーンコープ生協くまもと
グリーンコープかごしま生協
グリーンコープ生協おおいた
グリーンコープ生協みやざき
グリーンコープ生協おおさか
グリーンコープ生協ひょうご
グリーンコープ生協おかやま
グリーンコープ生協とっとり
グリーンコープ生協（島根）
グリーンコープ生協ひろしま
グリーンコープやまぐち生協